

# ホイットマンの同一化における「私」とその対象

山 内 彰\*

## Identification of Walt Whitman : “I” and its Objects

Akira Yamauchi

**Abstract :** One of Walt Whitman’s key themes is his persona “I” and its functions in the poetry. His “I” easily identifies everything the “I” watch, absorbing the object’s features and history. This peculiar identification has been drawing much attention from various perspectives : psychology, poetics, religious viewpoints and so on. This thesis points out that his identification is deeply related to what Whitman has experienced in his reading and urban experience. Compared with similar experiences by Balzac or Baudelaire, the fact that Whitman’s is also deeply influenced in urban environment will be revealed.

**Key words :** アメリカ詩 American poetry ホイットマン Walt Whitman 都市体験 Urban experience 遊歩者<sup>ゆうほ</sup> Flaneur

### 1

ソロー (Henry David Thoreau) はその著『ウォールデン』(Walden) の中で「たいていの本の中では第一人称の『私』は削られてしまうものだが、この本の中では残しておこう。エゴイズムという観点からすれば、それこそ一番の違いなのだから」と述べたことがある。ソローは「私」という第一人称を敢えて前面に打ち出して、自分という主体を自著の中心にすえたわけである。同じように、エマソン (Ralph Waldo Emerson) も「私」とそれ以外を区別しようと『自然』(Nature) の中で試みた。エマソンによれば、「私」とは意識であり、それ以外のもの(「私でないもの」‘Not-Me’)とは「自然や芸術、すべての他人とわたし自身の肉体」なのだ<sup>1)</sup>と定義している。

このように、超絶主義者 (Transcendentalist) と称される人々において、「私」は中心課題の

一つともいえるテーマであり、その点は、19世紀アメリカを代表する詩人であるホイットマン (Walt Whitman) においても変わらない。いや、それどころか、彼によってより深化した形態で、かつ、より激しい形態で、誇張されて表現されているのだといってもかまわないだろう。

チャリ (V. K. Chari) はホイットマンの詩のテーマを、自己 (Self) そのもの、あるいは自己と世界とのかかわりなのだと述べて、次のように解説している。

自己のテーマ、あるいは自己と経験世界との関係というテーマこそが、ホイットマンの詩を包括している意図にとって中心をなすものなのである<sup>1)</sup>。

この詩人にとって、「私」という主体のあり方、さらに、その主体とその周辺世界との関係こそが、重大なテーマであったことはまず間違いないだろう。それは、彼の代表的な詩である

\*関西福祉科学大学社会福祉学部 講師

「私自身の歌」(‘Song of Myself’)というタイトルをみても明白である。ホイットマンは、この詩の中で、「私」という存在をあらゆるものを含みこんだものとして表現している。彼のいう「私」はさまざまな要素を包含した存在であり、要素相互間に論理的な矛盾があったとしても、いっこうにかまわない存在として描かれている。

Do I contradict myself?

Very Well then I contradict myself,

(I am large, I contain multitudes.)<sup>2)</sup>

この有名な詩句にあるように、「私」は「自己矛盾」していてもいっこうに影響を受けないほどに「大きな」存在であるのだ。つまり、このことは、ホイットマンのいう「私」には少なくとも形式論理的な意味での理論は適用されず、その内容をとらえるには、もっと直感的な、もう少しいえば、神秘的な洞察が必要なのであろう。その意味では、彼の「私」は日常的な意味での自分というよりも、それを遥かに超えた、きわめて広大な存在であるのだろう。

ホイットマンが自己をどのように考えたかを知るために、後年彼が樹立した「パーソナリズム」(Personalism)という思想を今度はみてみよう。この思想においても、中心をなすのは、個人がいかなる人格、すなわち、パーソナリティーを有するのかという問題であり、アメリカ英語において、パーソナリティーをこのような心理学的意味に用いた初出例の一つだとされている。つまり、ホイットマンは、その後20世紀で問題となる個人の心理についてまで考察を深めていたわけだ。彼によれば、パーソナリティーとは自己にどのような性質が属しているかということであり、その思想的萌芽はかなり早くからあったらしい。すでに1857年ころと推定されているノートの記述には、次のような文言がみられるからである。

パーソナリティーという観念、すなわち、自己としての各人に所属するものであり、それは、節制、清潔で力強い身体、貞節、高尚な議論、瞑想、テーマを通じて精神を高め、自己に対する尊厳と神聖な愛によって高めてゆくことのできるものである。そうなれば、部屋に入っても、通りに出ても、支配力と魅力が会おう人すべてにあなたから注ぎ出ざるを得ないだろう<sup>3)</sup>

自己はどのような存在であるか、また、それを高めるにはどうすればよいのかといった着想とともに、そうした努力を繰り返してゆけば、他者を惹きつけざるを得ない雰囲気醸し出されるのだという、ホイットマン独特の思想がここには集約されている。もちろん、この文面には、19世紀の「国民文学」の樹立に伴って、いったいどのような市民が共和国民として望ましいのかという、模範的国民像を模索する思潮を読み取ることも可能である。さらに、「節制」「清潔」といった概念は、いかにすれば、衛生管理が身体に刻み込まれるのかという、近代社会が要求する清潔な市民像をイメージさせるだろう。

このように、ホイットマンにおいても近代性という概念と深い結びつきが見受けられるわけだが、ふたたび、詩人の「自己」というテーマに戻るならば、「自己としての各人に所属する」パーソナリティーという観念はすでに1850年代に現れており、これが後の『民主主義展望』(Democratic Vistas)へとつながるのだといえるだろう。それでは、詩人の全生涯にかかわる、この重要な課題である「自己」とは、具体的には、どのようなものだったのだろうか。

先にみたように、「私」への関心はホイットマンのみならず、この時代の識者、思想家に共通のものであった。本稿は、こうした時代を背景にしながら出てきた詩人の「私」を、彼の同一化の詩群とともに、考察しようとする試みである。

2

There was a child went forth every day,  
And the first object he look'd upon, that ob-  
ject he became,  
And the object became part of him for the  
day or a certain part of the day,  
Or for many years or stretching cycles of  
years.<sup>4)</sup>

この子供時代を回想したとも受け取れる詩は、全編にわたって「子供」が「目にした対象になる」様子が描かれている。心理学的には「同一化」と呼ばれる現象だが、まるで人生の体験とは、何かに同一化してゆくことだとしても思わせるかのように、「子供」は次々にさまざまなものに同一化してゆく。そして、その同一化は「一日中、または、一日の一部」継続することもあれば、「何年にもわたって、何年ものあいだずっと」続くこともあるという。だが、ホイットマンにおける同一化は、たんに子供時代の回想だけの話ではない。さらに成長して大人になっても、「私」はいろいろな対象に同一化してゆく。「私自身の歌」はそうした同一化の行程として読み解くことさえ可能なほど、同一化に満ちている。その中から典型例を1つ挙げてみよう。

How the lank loose-grown'd women look'd  
when boated from the side of their pre-  
pared graves,  
How the silent old-faced infants and the lifted  
sick, and the sharp-lipp'd unshaved  
men:  
All this I swallow, it tastes good, I like it  
well, it becomes mine,  
I am the man, I suffer'd, I was there.<sup>5)</sup>

「私」は、「幼児」「病人」「船長」などあらゆる他者に同一化し、それをとらえて、自己の内

側へと取り込んでしまう。「私」は私が本来有するはずの主体を失い、その対象へと完全に同化する。「私とその男なのだ。私が苦しみ、私は現にそこにいたのだ」という最後の行は、主体が客体と一致し、時制を越えて、完全な一体化を表している。そこには、論理的な主客の対立的枠組みはもはやなく、あるのは、他者の体験そのものを奪い取り、自己の一部としてしまう捕食的な行為のみである<sup>6)</sup>。「これらすべてを私は飲み込んだ、うまい、気に入った、それは私のものになる」という奇妙な詩行は、読みようによっては、幼児的な口唇期の衝動を感じるかも知れない。

だが、そうしたフロイト的な分析よりも、ここにある構図はもっと根深いものだろう。他者の体験や生きた歴史そのものを味わいつくし、気に入れば、体験そのものになり、時間を超越して、その体験を「私」の一部にしてしまう。それは、他者の経験を追体験しているというような時差のあるものではなくて、他者の行為そのものを「飲み込んで」おり、「私」はここで私として定立されているというよりは、むしろ、その行為を（原初的に）行なった他者そのものとして定立されている。「私」は、主体の壁や、時間の制限を越えて、その行為そのものを同化しているわけである。

だが、これは逆から考えれば、「私」にいかにも具体的内容がないかの表れだともいえるだろう。他者や他人の経験は「私」という、いわば「装置」を通り抜けながら、「私」を興奮させ、夢中にさせる。「私」は他者の経験そのものに没入できるほどに、外殻のない、奇妙に柔軟で、排他性のない存在なのだ。ホイットマンの言い方を借りれば、ここにみられる「私」とは、「伝導体」(conductor) にすぎない。

Mine is no callous shell,  
I have instant conductors all over me whether  
I pass or stop,  
They seize every object and lead it harmlessly

through me.<sup>7)</sup>

「私」の全身は、いってみれば「伝導体」のようなものであり、「私」が立ち止まるにせよ、通り過ぎるにせよ、いずれの場合であっても、「あらゆる対象を掴みとり、私の中を無害に通過させる」。最初の行に示されているように、「私」という存在は「殻のない」存在なのであり、どのような客体であってもなんなく通過させる。だが、同時に、ここで用いられている「無害に」という言葉には、「私」とは「伝導体」なのだという主張を裏切っている含みを感じられないだろうか。この言葉を書く前に、詩人はいかにこうした行為が自己にとって危険なものかを明らかに意識しているのではあるまいか。「無害に」という言葉には、詩人の主張を裏切るためらいが感じられる。他者の経験や外的な客体をそのまま自己の中に取り入れる行為は、ただ電気が伝導体を通してゆく現象とはまったく異なっているはずであり、それを詩人が知らぬわけがない。別の言い方をすれば、「私」には個性があり、人格があり、パーソナリティーがあるのだから、それは他者や「私」以外の客体と衝突し、何らかの「害」が発生するのではないだろうか。もし本当にまったく「殻」がないならば、もはやそれは「私」とは呼べず、外界との境界線も区別できない混沌の塊となるだろう。ちょうど免疫細胞が自己以外の他者を「異物」として攻撃し、排出しようとするように、「私」はそれ以外の存在を「異物」と感知するから「私」なのであって、もし外界と「伝導体」のような交流が可能ならば、それはもはや「私」という主体とは考えられないはずである。

とすれば、ホイットマンのいう「私」とは、物理的・論理的な主体というよりも、主体をあたかも装った、一種の精神的機能と考えたほうが分かりやすいのかも知れない。けれども、1節でみたように、ホイットマンは「私」というパーソナリティーを1つの思想にまで高めた

人物であり、個性や人格は彼にとって譲れない属性のはずである。ここには、散文的な理解では到達しえない、果てしない矛盾が潜んでおり、それが緊張感を伴いながら、詩として展開されているとでも表現できるだろう。

要約すれば、ホイットマンのいう「私」には、激しい個性を持った存在としての「私」と、いわば「伝導体」としての機能しかはたさない「私」という2つの契機があることになるだろう。

### 3

19世紀に加速度的に発展した都市には、さまざまな作家たちに衝撃を与える要素があった。いわゆる「都市体験」(urban experience)と称されるものである。こうした都市体験の中に、都市を散策し、その様子を眺めて回る「遊歩者」(flaneur)といわれる人々が登場する。大都市という人類史上初の生活の舞台に熱狂する人間が、都市の誕生期にはいたのである。そして、こうした遊歩者の感覚の中では、都市の様子を眺める主体である観察者と、眺められる相手である対象とのあいだに、「分離」が発生し、それを観察者はつよく意識することになった。1836年にある人物は、このことを次のように表現している。

共にいることであって、群衆の一部となることではない—見ることであって、見られることではない—観察するのであって、されるのではない—こちらが知り理解するのであって、そうされるのではない。<sup>8)</sup>

都市の群集を観察するためには、一定の距離が必要とされる。相手から距離をとって、相手を対象化し、こちらが観察する。相手から観察を受けるようではだめなのである。言い換えれば、観察者は群集に対して孤立した存在であり、20世紀風にいえば、都市のもたらす疎外を味わっているとでも表現できるだろう。都市

においては、人間は互いに無関心にならざるを得ない。流れる群集を前にした観察者は、距離をとることで、群集から浮いた存在となり、孤独に苛まれる。

O for the girl, my mate! O for happiness with  
my mate!  
O the young man as I pass! O I am sick after  
the friendship of him who,  
I fear, is indifferent to me.<sup>9)</sup>

「私が若者のそばを通り過ぎるとき」私は「友情を必死に求める」。けれども、その相手は、「私には無関心」ではないかと「私は恐れる」。私が求めている「友情」という名の群集との交流は、しかし、相手からみれば何の関心もないものにすぎない。観察者である私は、必死に観察対象である「若者」とのあいだに交流を求めるが、相手は無表情に通るだけである。

ここには、観察する者が感じる感情と、観察される側の無関心のあいだに心理的な裂け目がある。群集は私に「友情」をもたらすよりも、むしろ、「恐れ」をもたらしているのだ。観察者と群集のあいだには、「友情」ではなく、「無関心」が交錯する。だが、このように群集の中で味わう孤独は、一人ホイットマンだけのものではない。ボードレール (Pierre Charles Baudelaire) は、この体験を次のように解説している。

群集、孤独。活動的で多産な詩人にとって、たがいに等しく、置き換えることのできる語。己れの孤独を賑わせる術を知らぬ者は、忙しい群衆の中であって独りである術をも知らない。

詩人は、思いのままに自分自身でもあり他者でもあることができるという、この比類のない特権を享けている。[・・・] 詩人は、欲する時に、どんな人物のなかへで

も入ってゆく。かれにとってだけは、すべてが空席なのだ。

孤独にして思索を好む散歩者は、この普遍的な融合から、一種独特な陶酔を引きだす。<sup>10)</sup>

通常の文脈では、「群集」と「孤独」は反対語であろうが、詩人にとって両者は交換可能な語句なのである。なぜなら、ボードレールによれば詩人には、「思いのままに自分自身でもあり他者であることもできる」という能力があるからである。詩人は「どんな人物のなかへでも入ってゆく」ことができる。観察者と群集のあいだに開くはずの空隙は、この能力によって橋渡しされてしまう。自己と他者は「融合」し、詩人は「陶酔」する。

ここで、自己は自己でありながら、かつ、非自己でもある。ボードレールの言葉を使ってさらに言い換えれば、この自己は「あくことなく非我をもとめる自我」とも表現できるだろう。詩人である私は観察者とのあいだに本来あるはずの裂け目を乗り越える。どこまでも、相手を求め、相手との「融合」を果たし、「陶酔」にひたるのである。ホイットマンが一瞬感じた「恐れ」は消滅し、代わりに登場するのが、非自己と自己の一致した陶酔状態なのだ。

What gods can exceed these that clasp me by  
the hand, and with voices I love call me  
promptly and loudly by my highest name  
as I approach?

What is more subtle than this which ties me  
to the woman or man that looks in my  
face?

Which fuses me into you now, and pours my  
meaning into you?<sup>11)</sup>

町をゆく男女と私のあいだには、きわめて微妙な「絆」があるとホイットマンはいう。通りすがりの私という観察者と、その対象である群

集とのあいだには、微妙な、いわく言いがたいつながりが発生するというのだ。自己と非自己のあいだに本来あるはずの裂け目は、絆によって結合されるわけだが、その絆は「私をあなたの中へと融合させ、私の意味をあなたの中へと注ぎ込む」ことだと詩人はいう。私が対象に同一化を果たすことで、理論的に想定される自己と非自己のあいだが埋まってしまう。

これは、大都市を初めて体験した詩人や作家たちに共通の体験らしく、ホイットマンやボードレールのみならず、バルザック(Honoré de Balzac)もほとんど似たような経験に言及している。短編‘Facino Cane’の中で、バルザックは次のようにその体験を披露している。

わたしはその人たちの話を聞いているうちに、かれらの生活に入りこんで、それを自分のものにすることができたのです。わたしは身体にかれらのぼろの衣服を着ているのを感じました。足にはかれらの孔のあいた靴をはいて歩いているのでした。かれらの欲望とか要求といったものが、すべてわたしの心の中に入ってきました。あるいはわたしの心がかれらの心の中に入っていたのです。<sup>12)</sup>

「わたし」は「かれら」そのものでもある。対象の感情や欲望が観察者の内部に侵入し、あるいは、逆に、観察者の心が対象の内部に潜入する。この後者のありようは、ホイットマンが「私の意味をあなたの中に注ぎ込む」といったものとよく似ている。ボードレールにおいても、バルザックにおいても、ホイットマンにおいても、観察者は対象そのものに同一化し、本来考えられるはずの主客の対立を容易に乗り越えてしまう。バルザックの言葉を借りて簡潔に言えば、「観察によってわたしはその対象となった人物の人生を生きるという能力を与えられました」ということだろう。もはや、ここでは観察者／対象という区分は無意味であり、観察

者はすなわち対象であり、区分を乗り越える能力を有する存在なのである。

だが、こうした区分の超越は、果たして本当に実現できるのだろうか。当然のことながら、いくら詩人が熱狂的に群集の特定の人物になりきったとしても、現実はその人物になるわけではあるまい。どんなにそうした能力があると言い張ってみても、実際に他人になることなど、少なくとも物理的には不可能であろう。とすれば、この区分の超越は、現実ではなく、ある種の観念の上で行なわれていることであり、ボードレールの先の言葉を使えば「陶酔」にすぎないだろう。あるいは、バルザックは「陶酔」の代わりに、「覚めている人間がみる夢」だと表現している。もう少し詳しくいえば、その「陶酔」「夢」とは、「習慣を離れ、精神的機能の陶酔によって自己以外のものになること、そして意のままにそのような遊戯に耽ることがわたしの気晴らしになったのです」とも書かれうるものだったのである。

この「遊戯」「夢」「陶酔」とは、自己以外の他者になるという瞬間を味わうことであり、観察者の側が、それが相手に違いないと一方的に信じている内容を心理的に体験することである。ホイットマンがいうように「わたしの意味をあなたに注ぎ込む」こと、すなわち、観察者が相手に対して主観的な意味づけをする行為ととってもいいだろう。これは、きわめて主観的な行為であり、バルザックがいうように「習慣を離れ」なければできない行為である。習慣、つまり、社会的に共通された約束事から離れ、まったく個人的な意味づけが行なわれてしまう。だから、それは自己と非自己が出会い、相克するような瞬間ではなく、自己が勝手に作り上げた非自己と思われるものと出会い、溶け合う瞬間なのだ。

別の言い方をすれば、知覚や想起といった現実と深く関連する精神活動というよりも、知覚を通じた刺激を受けた想像力の問題だといってもいいだろう。だから、詩人の能力とは、他者

の経験を我が物とするというよりも、自己が対象を見ることで、空想する他者の内部に自ら引き込まれ、熱中するという事にほかならない。もっと簡潔に言えば、自己は他者を空想的に味わっているだけであり、その意味では、バルザックもいうように「遊戯」に過ぎない。ホイットマンの「私」はこの遊戯に耽る存在でもあるのだ。

しかし、こうした精神的な遊びを続けることにどれほどの意義があるというのだろうか。私が通りすがりの人物から直感的に受け取った情報から勝手に作り上げる相手の人生の内部に熱中したからといって、それが何になるというのだろうか。確かに「私」はこの「遊戯」に最初熱中する。しかし、それを何度も繰り返すうちに、その虚しさに気づき、また、その熱狂に由来する疲労を感じ始める。「私自身の歌」の中で、ホイットマンはまさにそうした体験を詩に書いている。

Enough! enough! enough!  
Somehow I have been stunn'd. Stand back!  
Give me a little time beyond my cuff'd head,  
slumbers, dreams, gaping,  
I discover myself on the verge of a usual mistake.<sup>13)</sup>

ボードレールが「陶酔」と呼び、バルザックが「夢」と表現した精神作用を、彼もまた「まどろみ、夢」と表現している。「夢」にはまりこんでいた「私」は、ふと我に帰り、「よくやる間違い」に気がつく。もう「十分！ 十分！

十分！」なのだ。いくら対象に同一化し、熱狂し、陶酔したところで、本当にその相手になるわけではない。それは、幻であり、ただの「私」の「遊戯」なのだ。こんな「遊び」を続けたところで、何の価値もないではないか、少しやれば「十分」なのである。かくして、いくら「私」が陶酔し、楽しんだところで、しょせん、それは「誤り」なのだ。「私」は気がつく

のである。

#### 4

対象と同一化するというこの現象は、当然のことながら、自己と対象が分離していなければありえないだろう。認識論的に言い換えれば、主観と客観の対立と呼んでもかまわない現象である。同一化とは、主観が客観を取り込み、飲み込んでしまうという精神上の作用である。そして、この作用そのものは、物理的な現象ではなく、精神的な現象であり、想像力に基づいているのだといわねばならない。

想像力ではこのように主観によって自由にその内容が定立されるのに対し、それが知覚である場合には、その対象は所与として現れる。人が目を開くとき、そこに世界が現出するのは、妄想ではなくて、知覚の対象が所与だからである。敷衍すれば、知覚とは、自己以外の領域から自己へとやってくるもの、すなわち自己以外のものが存在していることを指し示すものでもあるのだ。自己の向こう側に紛れもない非自己が存在しているということが、知覚を通じて把握されるわけである。この現象がホイットマンを夢中にさせる。彼はノートのかなで、次のように記している。

ほくが二つの瞼を開くと、それは桃の種ほどの大きさしかないのに、何と、見よ！  
曰く言い難いほどの多彩さと圧倒するよう  
なきらびやかさで、世界全体が、黙ったま  
ましかも素早く、ほくのところにやってくるのだ。<sup>14)</sup>

目を開くと、そこには既にあるものとしての世界が存在している。このことにホイットマンが感動するのは、まさに知覚がもたらすその性質によるのである。知覚によって、人は非自己たる所与の存在を確認するわけだ。

とすれば、「私」が自由に対象と交わり、同一化するためには、知覚という別の精神のはた

らきが必要だということになる。想像力だけでは、都市の遊歩者たちが体験した「陶醉」や「夢」は経験できないのである。対象を飲み込み、味わう捕食者的な主体であっても、その前提として、対象そのものが実在しておらねばならない。想像力に酔いしれる前に、その対象そのものを知覚せねばならないのである。

だが、かりにこの順序が無視されれば、何が起きるだろうか。あるいは、あまりに想像力がつすぎて、本来知覚がもたらさずの現実を超越するに至ったらどうなるのだろうか。「私」は想像力によって対象と融合を果たし、「陶醉」するのだが、その勢いがあまりに強力で知覚そのものにまで影響を及ぼしたら、どうなるのだろうか。

Saw many I loved in the street or ferry-boat  
or public assembly, yet never told them  
a word,<sup>15)</sup>

「一言もことばを交わさない」にもかかわらず、「私」は「大勢の人間を愛した」とホイットマンは詩の一節に書いている。この奇妙な文句は、知覚されただけで何の交流もない他者を、想像力のなかできわめて親しい人として愛しているということである。「私」の意識によって自由になる部分と、「私」によってはどうにもならない現実とが重ねあわされた結果、客観的には理解しにくい内容が表現されている。

Passing stranger! you don not know how  
longingly I look upon you,  
You must be he I was seeking, or she I was  
seeking, (it comes to me as of a  
dream).<sup>16)</sup>

「通りすがりの見知らぬ人」に対して「私」は「恋焦がれてあなたのことを見ている」。現実にはただの他人なのだが、想像力の中ではこの他人こそ「私」がずっと探していた人に違いな

い」のである。だが、最後の詩句にあるように、こうしたことは「あたかも夢のよう」な出来事なのである。この「夢」という言い方は、先にみたボードレールやバルザックの発想と軌を一にしている。しよせん、現実の知覚された対象をすぐれて活発な想像力によって親しい存在としてみたところで、実際には「私」が勝手に構築した私的世界にすぎないだろう。通りすがりの他人とは、まさにそのようなものと知覚され、把握されているから、「通りすがりの他人」なのであって、詩人自ら言うように、相手は「私」が「恋焦がれている」ことなどまったく「知らない」のだから。

とすれば、こうした「陶醉」には客観性はほとんどないことになる。いわば、「私」が一人、外界から触発された想像力の内部で遊んでいるような状態なのだ。それは、「夢」にすぎず、決して客体と本当の意味での交流が行なわれているわけではないだろう。相手は「私」が「恋焦がれている」ことを「知らない」どころか、「私」がそうした思いで相手を眺めていることにすら、気づいてもいないだろうから。

言い換えれば、この想像力が過剰に働いた「陶醉」の状態とは、客体からその異質性、現実性が剥奪され、「私」によって私的な意味が付された状態といえよう。客体はその本来の中身を失って、「私」の個人的な精神のはたらきの内部にとりこまれた存在へと変容する。初めに知覚がとらえた自己の外の世界は、「私」の過剰な想像力によって異常な輝きを発しながら「陶醉」を引き起こす。だが、その「陶醉」がつよければつよほど、客体からは現実性がなくなり、それは実体というよりも、何かの仮象に見えてしまう。

As seen in the windows of the shops as I turn  
from the crowded street and peer through  
the plate glass at the pictures or rich  
goods

In Broadway, the reflections, moving, glisten-



ing, silen,  
Turn from the heavy bass, the great hum and  
harshness.  
The faces and figures, old and young all so  
various, all so phantasmic-The omnibus  
passing and then another . . .<sup>17)</sup>

通りをゆく群集は、まるでウインドウ・ショッピングするときの「商品」とさして変わらない。そこに痛みを伴った現実の人間が生活しているというよりは、それは「絵」の一部のようであり、あまりにさまざまな人が行きかうので「いずれもまるで亡霊みたい」に思えてくる。「私」はそうした群集や町の様子を「覗き見」する遊歩者として、その様子を記述している。だが、その記述は興奮に彩られているにもかかわらず（「あまりにさまざまで、あまりに亡霊みたいで」と強調語が用いられている）、その伝える内容は動き続ける町の外観であり、人間の本質にふれるような何かではない。町の喧騒に「陶醉」する「私」は、しかし、その「陶醉」を通り越して、そこに人間ではなく、「亡霊」を見出す。果たして、目の前にいる知覚された対象は本当に人間ののだろうか、ひょっとすると亡霊ではあるまいかという疑念が頭をもたげ出すのだ。

The thick crowds, well-dressed—the continual  
crowds as if they would never end  
The curious appearance of the faces—the  
glimpse just caught of the eyes and ex-  
pressions, as they flit along, (You phan-  
toms! oft I pause, yearning, to arrest  
some one of you!  
Oft I doubt your reality—whether you are real  
—I suspect all is but a pageant.)<sup>18)</sup>

町に行く群集は「終わりなく続く」。彼らが「私」のそばを通り過ぎるとき、「私」は「そのうちの一人を捕まえて」みたい衝動に駆られ

る。というのも、「本当にあなたが存在しているのか」どうか、「あなたの現実性を疑ってしまう」からである。次から次へと「私」の前を通り過ぎてゆく、さまざまな背格好の群集は、「私」に「陶醉」を引き起こす。知覚された対象の動きに刺激され、遊歩者の想像力は一挙に高まり、その対象と融合し、その対象を「愛して」しまう。だが、次の瞬間、そのように主体の側に完全に引き寄せられた対象からは、非自己性が感じられなくなり、他者であれば必ずあるはずの反発力がなく、ただ「私」に捕食され、意味付与されてしまう存在として感じられ始める。すると、「私」は対象をもはや現実そこに生きている人間としてよりは、そのあたりを彷徨う「亡霊」のように思ってしまうわけである。

「私」が「陶醉」によって「飲み込んだ」対象を「亡霊」だと感じるのは、「亡霊」とはそこに存在しているように見えるが、実際に捕まえようとするとも捕まえられないものだからである。言い換えれば、「私」の捕食行為によって捉えられた対象に、「私」はもはや現実味を感じなくなっているのだ。精神活動だけでは、その存在そのものが不安となった「私」は、その対象を実際に触って、確かめたい衝動に襲われる。かくして、「私」の知覚から始まった精神的な興奮は、いつの間にか、外界の現実性への懐疑というかたちで終わるのである。

## 5

ホイットマンのいう「私」は肉体的な現実性を伴った人間というより、想像力につよく支配された精神的な機能として解釈したほうが分かりやすいだろう。「伝導体」として何でも受け入れてしまう「同一化」機能としての「私」と、激しく他者や歴史、伝統、文化、習慣、掟といった束縛に反抗する個性的な「私」が、緊張を伴いながら両立している。だが、この二つの機能は、別々のものとして成立しているというよりも、「私」という個性が際立ってつよい

という意味では、同じものだともいえるかも知れない。

ここで認識論から神秘論へと飛躍すれば、ホイットマンのいう「私」とは、同一化や陶酔を可能とし、従来の価値観に縛られることのない「魂」というきわめて自由な存在なのである。だから、「私」が何にでも「同一化」できるのは、たとえばブラック (Stephen A. Black) などが主張するような「幼児的退行」を表しているのではなく、「私」という「魂」の持つ無限の可能性を表象しているのである。「魂」があらゆる物体になれるとすれば、それを保有する「私」にもそれができるはずだというのが、彼の基本的な考え方にあるのだろう。

The soul or spirit transmits itself into all matter—into rocks, and can live the life of a rock—into the sea, and can feel itself the sea—into the oak, or other tree—into an animal, and feel itself a horse, a fish, or bird—into the earth—into the motions of the suns and stars—

A man is only interested in anything when he identifies himself with it . . .<sup>19)</sup>

「魂」は何にでもその姿を「伝達する」ことができる。この「伝達」(transmit) という言葉は、「同一化」(identify) という言葉に置き換えられている。つまり、「魂」はあらゆる存在に同一化できるものであり、また、そうしたときにのみ、世界に対して積極的な関心を持つのだというのが、ホイットマンの主張なのである。すでに2節で「私自身の歌」の中の同一化のセクションをみたが、そのセクションの冒頭は実は次のように書かれていた。

Space and Time! now I see it is true, what I  
guess'd at,  
What I guess'd when I loaf'd on the grass,  
What I guess'd while I lay alone in my bed,

And again as I walk'd the beach under the  
paling stars of the morning.

My ties and ballasts leave me, my elbows rest  
in sea-gaps,

I skirt sierras, my palms cover continents,

I am afoot with my vision.<sup>20)</sup>

「私が草の上でぶらついて思ったこと」とは、魂の働きこそが人間の精神構造に中心にあるということである。「私」は「空間と時間！」と叫ぶ。だが、この「空間と時間」は決して「私」の行動を束縛するものではなく、「私」の限界を示すものでもない。常識的な理解や物理的な法則を超えたとき、あるいは、バルザック流に言えば、「習慣を離れ」れば、空間や時間を超越できる存在になるのだ。「いましめや重りが私から離れてゆく」という詩行はまさにそのように解釈されねばならないだろう。そうした「私」を縛るさまざまな習慣がなくなると、「私」は想像力を主体とした「伝導体」へと変化する(「私はヴィジョンとともにゆこう」)。そして、そのように時空を超越しうる存在となった「私」、言い換えれば、「魂」そのものとなった「私」は、どのようなものにも「同一化」できるようになるのだ。

あまりに自由なホイットマンの「私」は、その機能だけとらえれば一種の「伝導体」に近く、知覚された客体を「無害に」通してしまう存在であり、あらゆる物理的な束縛を超えてすべてに「同一化」してしまう「魂」なのである。だが、前節で検証したように、過度に自由な想像力は、むしろ現実性を失い、知覚された存在そのものを疑うという懐疑へと陥っていった。同様に、これほど自由で融通無碍な「私」はもはや現実世界の人間というよりは、「魂」であり、時空をも超越しうるという意味で、現実世界の中に生きる余地はない。皮肉なことに、「私」は生き生きとこの世を生きる存在というよりも、魂だけの存在という意味では「死

者」に近づいてしまう。

Pensive and faltering,  
The words *the Dead* I write,  
For living are the Dead,  
(Haply the only living, only real,  
And I apparition, I the spectre.)<sup>21)</sup>

「生きるものは死者」であるというこの不可解な詩行は、今まで検証してきたホイットマン特有の考え方を入れなければ読み解けないだろう。そして、このような考え方をとれば、「私、すなわち亡霊」と言わざるを得なくなってくるだろう。ちょうど、対象が完全にその他者性を奪われた結果、「亡霊」となったように、物理的・社会的束縛をすべて失った結果、「私」もまた、「亡霊」に過ぎなくなる。ホイットマンの同一化とは、その同一化の過程において、「陶醉」を味あわせ、その「陶醉」の中で「魂」の有する無限界性を享受できるのだが、最終的な過程にあっては、自己も非自己も「亡霊」と化してしまうような危うさを孕んだ精神的作用なのだとは結論してもかまわないだろう。

#### 引用文献

- 1) V. K. Chari, *Whitman in the Light of Vedantic Mysticism* (Lincoln: U of Nebraska P, 1976), p. 18.
- 2) Walt Whitman, *Leaves of Grass*, ed. Sculley Bradley and Harold W. Blodgett (New York: W. W. Norton & Company, 1973), p. 88. LG と略記する。
- 3) Walt Whitman, *Notebooks and Unpublished Prose Manuscripts*, ed. Edward F. Grier (New York: New York UP, 1984), 399. NUPM と略記する。
- 4) LG 364.
- 5) LG 66.
- 6) James Dougherty, *Walt Whitman and the Citizen's Eye* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1993), p. 146.
- 7) LG 57.
- 8) Dana Brand, *The Spectator and the City in the Nineteenth-Century American Literature* (Cambridge: Cambridge UP, 1991), p. 71.
- 9) LG 77.
- 10) ボードレール著、福永武彦編『ボードレール全集Ⅳ』(人文書院、1964年) p. 303.
- 11) LG 164.
- 12) Honoré de Balzac, *Gobseck suivi de Facino Cane et de Maître Cornelius* (Paris: Gallimard, 1969), p. 102.
- 13) LG 72.
- 14) NUPM 106-7.
- 15) LG 163.
- 16) LG 127.
- 17) Walt Whitman, *New York Dissected*, ed. Emory Holloway and Ralph Adimari (New York: Rufus Rockwell Wilson, Inc., 1936), p. 222.
- 18) LG 661.
- 19) Paul Zweig, *Walt Whitman: The Making of the Poet* (New York: Basic Books Inc., Publishers, 1984), p. 174.
- 20) LG 61.
- 21) LG 455.